

SDGs/CSR Frontier

スポーツの持続可能性

4 質の高い教育をみんなに

8 働きがいも経済成長も

17 パートナリシップで目標を達成しよう

体育会の学生は総じて就職活動に強いとされてきたが、状況は変わりつつある。日本能率協会マネジメントセンターは「統制型の組織では礼儀正しく上司に従い、猪突猛進する体育会出身者がもてはやされた。でも今の企業の人事担当者は自分で考えて行動する自律型の人材が必要だと考えている」と分析する。

人事担当者の交流会組織、日本CHO協会(南部靖之代表)が3月に実施したアンケート調査では「自社に自律型

「企業人になれる選手」に需要

企業は自分で考え主体的に行動する自律型人材を求めている



日本CHO協会:「自律型人材と人材開発/育成」に関するアンケートを基に作成(人事担当者対象に2021年3月実施、回答数129件、複数選択)

人材はどの位必要だと思いか」との質問への129件の回答中「50%以上、80%未満」が最多の38%。「80%以上、100%未満」の15%、「100%」の9%と合わせて6割を超えた。

「現在、自社内に自律型人材はどの位いると思うか」との質問には「10%以上、30%未満」が43%、「10%未満」が32%(同回答数)。いかに企業が自律型人材を求め、かつそれが不足しているかが分かる。

営業にも個人の企画力が重要な時代、自律型人材とは何か。「常に自ら考え、主体的に仕事を進めていく人」と多く

の人事担当者は捉える。終身雇用や年功序列など日本の就労観も変質している今、企業人は「自身がキャリアプランを考えて進む」ことも求められる。

体育会の中でも最近のラグロスやラグビーなど自分で戦略を考える競技の学生は需要がある反面、監督命令に忠実なプレー重視の印象がある野球はいささか分が悪いという。日本野球連盟の筒井崇副会長は「企業人として仕事を続ける自覚を持って就職してほしい」として「企業人になれるアスリート」の成長を期待している。

目標と自分の縦比較 監督・選手の意識改革を

スポーツ心理学者 布施 努氏

スポーツとは、どんな犠牲を払ってでも勝て、ではなく、今の状況でできる最大の努力をし、と人に求めている。東京五輪でも負けて「すみませんでした」と謝るアスリートがいたが、自分がその試合で最大限の努力を払ったかどうかを考えたい。アスリートのキャリアも人生も試合の後に続く。勝つこと、経験すること、成長することの3つをバランス良く見て選手に伝えられれば、パリ五輪など「次」を目指して前向きに動き出せる。

他人との横比較でなく、目標とする自分との縦比較で個性を伸ばし、心理的安全性を確保しつつ持てる力を発揮できるようにする。そのためには、オリジナルの個人の性格ではうまくいかない場合がある。監督・選手間で「役割的性格」をつくり、選手が演じられるようにする必要がある。企業の人事も全く同じ。役割的性格をどう演じて仕事で力を発揮してもらうか。自律的に物事を考えて初めて行動変容が起きる。意識改革が必要だ。



選手は真剣にメンタルトレーニング研修を受けた

8月、「社会人野球の価値を上げる」(筒井崇副会長)「野球連盟副会長」方針の下、社会人日本代表が都内で強化合宿を張った。「グラウンドでの練習だけでなく、1日2時間

データで「個」強化 日本代表で試み

「座学」のある強化合宿 屈強な男たちが座って講義を聞いている。

「五輪メダリストに共通する特徴は何か」 講師を務めているスポーツ心理学者の布施努氏が問うと、その答えがプロジ

ほどの座学を取り入れた。連盟初の試みだ(石井章夫監督)。

目標は2022年9月のアジア競技大会(中国杭州市)での金メダル獲得だ。東京五輪ではプロ中心の日本代表が金メダルに輝いた。東芝やホンダなど企

業からの社会人代表も刺激を受け、我らも、と意気上がるが、闇雲に実戦練習はしない。座学のメンタルトレーニング研修、投球や打球のデータ測定など地味なメニューが並ぶ。

講義では選手たちがノートに課題を書く。「不安を正直に書いて整理するのが大事」と布施氏は説く。ノートを付ける習慣は、選手の心身を鍛える鍵を握る。自由に書きやすい設計の特製の「代表ノート」を提供しているのがJMAAMとその子会社

グラウンドにいる選手らの姿に目を移すと、その様子は練習よりも身体測定に近い。投手と打者の間に「ラウンド」と呼ぶ弾道計測器を置き、打者は腕にセンサーを巻いている。投球と打球の速さや角度を測っているのだ。

ここでは国学院大学でバイオメカニクス(生体力学)を専攻する神事努准教授が知見を提供する。「データでプレーを可視化し、選手を公正かつ適切に起用できるようにする」(神事氏)

面もある。引退後も蓄積したノウハウを生かし、少年野球や中・高校の部活への支援を期待したい。そのために社会人としても成長し続けてほしい。

「スポーツ科学はデータサイエンス、心理学、行動科学など様々な分野を含む。異分野の専門家の協働で支えていくのが科学的アプローチによるプログラムだ。野球に限らず、社会人として通用する人材の育成にも役に立つ。コーチとなる専門家は、問いかける手法で選手の自主性を引き出し、フィードバックしていくことがポイントだ」

Interview

社会人野球日本代表の育成プログラムは、中高生の部活から企業の社員教育まで社会全般への応用が利く。日本能率協会マネジメントセンターの張士洛社長に狙いを聞いた。

「スポーツとノートは縁が深い」

日本能率協会マネジメントセンター社長 張士洛氏

ノウハウ 学生競技や地域活動にも

い。マラソンの大迫傑選手も大リーグのダルビッシュ有選手も一流アスリートは皆、ノートをつけて自己鍛錬してきた。当社グループは、NOLTY(ノルティ)ブランドのノート事業で培った人材育成支援の視点から社会人野球代表のプログラム支援に参画し、独自仕様の社会人代表用ノートを開発した。企業の顔として、トップ社会人として、どうあるべきか、書いて考えてもらう。

「社会人野球の一大イベントに都市対抗野球大会がある。選手は地域と企業の代表という側面もある。引退後も蓄積したノウハウを生かし、少年野球や中・高校の部活への支援を期待したい。そのために社会人としても成長し続けてほしい」

「スポーツ科学はデータサイエンス、心理学、行動科学など様々な分野を含む。異分野の専門家の協働で支えていくのが科学的アプローチによるプログラムだ。野球に限らず、社会人として通用する人材の育成にも役に立つ。コーチとなる専門家は、問いかける手法で選手の自主性を引き出し、フィードバックしていくことがポイントだ」

JMAAMや専門家が協働、社会人野球で

スポーツ界も今、選手のセカンドキャリアなど持続可能性の問題に直面する。その中で日本野球連盟はスポーツ心理学、生体力学などの専門家や日本能率協会マネジメントセンター(JMAAM)と組み、社会人日本代表で科学的アプローチによるアスリート育成を始めた。「個」のメンタル強化やプレーの数値化・可視化で自主性を伸ばし成績向上につなげる。根性や努力に加え、社会人としても能力の高い人材を育てる「スポ根+α」を広げる挑戦が始まった。

「思考を可視化し、経験を深化させる」ことの効用を唱える。

プレーを可視化

グラウンドにいる選手らの姿に目を移すと、その様子は練習よりも身体測定に近い。投手と打者の間に「ラウンド」と呼ぶ弾道計測器を置き、打者は腕にセンサーを巻いている。投球と打球の速さや角度を測っているのだ。

データは公開する。野球界全体の技術の底上げと競技人口の増加、活性化につなげる。「科学的データを使えば、中学生でも努力目標を設定し取り組める」と日本野球連盟では考えている。石井監督は話す。自主性重視のプログラムを、他競技や日本社会の活力向上のためにも発信していく。

「スポ根+α」科学で支援